

銅賞

心の国境を越えて

横須賀市立馬堀中学校三年

松下竜大

みなさんは外国人のことをどう思っていますか。同じ人間として、それとも厄介ものとして。きっと後者の考えの人もいるのではないのでしょうか。僕も考えてしまうこともありました。しかし、その決めつけている考え方はアメリカに行つて大きく変わりました。

小学校二年生るとき、僕は父の仕事でアメリカに行くことになりました。自分がアメリカに行くなど考えられず、実感が湧きませんでした。親は急いで僕を英会話教室に入れましたが、時間が足りずほぼ英語が話せない状態でアメリカへ飛び立ちました。アメリカに着くとすぐ現地の小学校へ転校し、さっそくアメリカの教室へと入りました。始めは僕に話しかけてくれる人がいましたが、なにも話せなかったので会釈だけしてその場をおさめていました。それから僕は周りになじめるように頑張りました。しかし、その頑張りの外国との考えの違いで僕は心が折れました。

ある昼食の時間、僕はいつものように母に作ってもらったお弁当

を食べていました。アメリカの小学校では一つの長いテーブルにクラス全員が座って食べていて僕はいつも端の方で食べていました。するとそこにピザやマカロニチーズといった西洋風の食べ物をもった子が僕の横に座りました。僕はその子の食べ物に関心しながらお弁当を食べていたらいきなり

「こいつゴミ食べているよ。」

僕は最初なにを言われたのかがわかりませんでした。しかし隣を見るとその子は僕をいやがるように席を移動したのです。僕はこのとき自分のお弁当がゴミだと言われたのに気づきました。僕はショックでしかたがありませんでした。いつも日常で食べているものが他の国の人から見ればゴミと思われることを知り、僕がアメリカという異国の地に今いるのだと感じさせられました。そしてここでは僕は外国人として生活しているのだと強く感じさせられました。

数日後の昼食の時間、僕はおそろおそろお弁当を食べていると今度は違う人にお弁当の中身をバカにされたのです。僕が一口食べるとその子は毎回オーバーなほど僕を笑いました。そのとき僕は怒りがこみ上げ

「ふざけるな」

と大声で怒鳴りました。周りの人もビックリしたようすで僕を見ていて、バカにした子も驚いたようすでした。次の日の昼食の時間、僕はお弁当を食べるか迷っていたとき、僕の周りにはたくさんの方々が座っていました。そして思いがけない言葉に僕は耳を疑いました。

「君の弁当の中身を食べてみたい。」

僕はまたからかわれているのではないかと思いました。しかし、いつもとはようすが違い、僕がおそろおそろ渡すと

「これおいしい」

と言ってくれたのです。僕はうれしくなり周りにいた人にもおかずやおにぎりを渡しました。するとこの前までバカにされていたとは思えないほどみんながおいしそうに食べてくれたのです。そして最後には、

「ありがとう」

と日本語でお礼をしてくれたのです。

僕はアメリカに行って外国で暮らしたいへんさと外国人とのコミュニケーションの難しさ、そして文化の違いについてさまざまのことを学びました。その中でも僕が一番大事だと思ったのが相手に自

分のことを理解してもらおうことだと思いました。外国にいくと文化が違うため自分が正しいと思うことも、現地の人にとっては正しくないかもしれない。つまり自分の特徴を現地の人に理解してもらいその上で自分は現地の文化に慣れていくことが大事だと思いました。これは僕たちが住んでいる横須賀でも僕たちが外国人にとらなければいけないことだと思います。横須賀を歩くと周りには外国人がたくさんいます。そこで日本人からしてみれば疑問に思う行動をとったりすることがあるかもしれません。そのとき僕たちはその行動を、外国人だからと受け止めることが大事だと思います。僕たちは外国人を受け入れる側として相手を理解した上でいっしょに生活していくことが僕たちが外国人に求められていることだと僕は思います。